

氏名	宮崎 啓太
ヨミガナ	ミヤザキ ケイタ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第458号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 内包する光：ヘテロトピアの表象 〈作品〉 黒い木 泉 胚胎

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	橋本 明夫
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	赤沼 潔
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	篠原 行雄
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	島田 文雄

（論文内容の要旨）

本論文は自身の作品を通して社会を考察する事を目的にしている。私は展示空間にヘテロトピアとしての場を構築することで、観者を幻想と現実の中間に位置するように促している。それにより、社会を再考察すると同時に、人々の創造性を回復することができる考える。ヘテロトピアは社会学で主に使われる言葉で、現実空間とユートピアの中間に位置する場である。私が作品の中で、ユートピアやヘテロトピアという概念を重視するのも、私自身が社会の中の一要素として存在し、作品が社会に対しての観察、応答として生成され、空間を通して行われるからである。私にとって、現実空間で実際の物体によって創造性の回復を問うことは、非常に重要な意味をもつ。なぜならば、物質は私に確かな世界の存在を感じさせると同時に、自身の存在をも再確認させるからである。物質や空間を通して世界の感触を確認していく行為は、現在の情報化社会への反応であり、同時に問いかけでもあると感じている。

その中で鑄造物を作品の中に取り込む事は、私自身にとって重要な意味を持っている。美術鑄物や産業鑄物と言われるように、社会の中での鑄物のあり方は幅広いが、その二つは、私の中ではある一定の隔たりをもって存在している。粘土、木、石膏、蠟などの素材と美術家が、干渉することによって生まれた原型が、土や石膏の鑄型によって虚の空間へと転化し、その空間に溶けた金属が流れ込む。そして再度、美術家が鑿や鑿、切下げなどの道具で、鑄造された金属と関わることで、鑄物は作品として成立するのである。このように生み出された鑄物は、手の感触を内包し、産業鑄物ではもちえない存在感を纏う。その存在感が観者の触覚に交わる時、創造性の引き金を引くのではないかと考える。

この論文で私は、このように生成された鑄物が、展示空間で、どのようにヘテロトピアを生み出すのかを考察した。美術家の身体を通して生み出された鑄物は、物質としても抽象的な概念としても、光を内包するのではないかと考える。物質的に研磨された金属は、反射することで光を放つ。また美術家の手によって造形された有機的なフォルムは、生きた形態として作品の中で機能し、生命の光を内包する。それは、闇を照らし出す祈りのような光であり、それがこの社会を考察するための光になるのではないか。自身の作品を考察すると共に、鑄物、光、ヘテロトピアの関係を論述した。

第1章では、自作品から全体の論点をまず説明する。それにより、自身の作品と社会の関係、および私が鑄物に見いだす媒体としての特質を論じた。第2章では、鑄物と空間の関係性について論じた。私の作品の中核となる概念、トマス・モアのユートピア概念、ミシェル・フーコーのヘテロトピア概念について言及し

た。鏡の空間、そしてヘテロトピアの原理を概観することで、ヘテロトピアがどのようにあり得るのかを捉えた。第3章では、鋳物が美術の場と空間の中で、どのようにヘテロトピアを構築してきたかを考察した。宗教空間での一例として、東大寺の盧遮那仏について論じた。私は、仏教空間は一種のスペクタクルとして機能し、人々にユートピアを想像させることによって、現世における苦痛を和らげる浄化作用を担っていたのではないかと考える。その視覚的効果として、黄金に輝く金銅仏が配置されたのではないか。宗教とヘテロトピア、そして鋳物との関係性を論じ、そこから展示空間の中でどのように鋳物が機能しているのかを考察した。例としてジェフ・クーンズ、アニッシュ・カプーア、そしてマシュー・モナハンの作品について、鋳物が展示空間でどのようにヘテロトピアを現出しているかを論述した。そしてそれらの作品と社会システムの関係、資本主義と消費社会が生み出した影とそれを映し出すヘテロトピアの関係性を論述した。自身が身を置く社会のこれらの関係性を考察することで、現代社会での鋳造表現、ひいては自身の作品がどのように機能しうるのかを、第4章で提出作品から考察した。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、鋳金を専攻する筆者が、大量消費・廃棄によって成り立つ現代社会の現実を批判的に捉え、使用済の工業部品から有機生命体のような造形をつくり出すことで、未来的な新生あるいはユートピアイメージを表象する試みを論述したものである。

ここでまず前提となっているのは、第1に機械による大量生産が、基本的には型から作品をつくり出す鋳造と同じ技法によっていること。これが、鋳金から社会を批判的に捉えようと筆者が考える根拠になっている。第2に、研磨された金属が放つ光を、筆者の作品では生命の光として転生させているのだが、金属が素材的にもつこの表現の可能性を、金属が“内包する光”として捉えていること(論文メインタイトル)。第3に、しかしユートピアは実際には存在しない観念的な理想世界であるため、現実世界でそれを志向する作品を、ユートピアとディストピアをつなぐ“ヘテロトピア(混在郷)”として捉えていることである(サブタイトル)。

第1章では、自作品を中心にまず作品コンセプトと現代社会への筆者の視線について述べ、第2章で鋳物がつくり出す物質的・宗教的空間性、および作品とその展示空間をヘテロトピアと捉えることについて述べる。第3章では、そうしたヘテロトピアの事例として、東大寺の宗教空間や、ジェフ・クーンズ、アニッシュ・カプーアの作品での消費社会への批判的視点。自作での表現につながる、物質素材がもつヒエラルキー(たとえばブロンズ・大理石・ガラスは上位、紙・石膏は下位)と、その意味の組みかえによる表現の可能性について論考する。そして第4章で、今回の提出作品3点、「黒い木」「胚胎」「泉」について解説している。

この提出作品のタイトルからもわかるように、筆者の作品は自動車の燃料タンクや排気管と、紙素材のハニカムストラクチャーを組み合わせながら、それらが植物として新生していく様子をイメージしている。それは機械文明が減んだのちに、荒廃した大地から新たな生命体が生まれていくSF的なイメージを持っているが、筆者はそこに必ずファンタジーの要素を加えている。筆者がそもそもこうした作品をつくるようになった契機は、街中で偶然見たリサイクル工場で、廃棄された空き缶などが圧縮され、その塊が山のように積み上げられた不気味な光景と、そこで感じた背徳感に似た感情にあったらしい。筆者のそれまでのコンセプト的な作品に対して、ここから現在の作品へと大きく転回するには、産業革命発祥地のイギリスへの留学も影響したようだ。

中間審査では論文作成の進捗状況の遅れが心配されたが、完成バージョンは読みやすい文体で、とくに鋳造による現代社会への批判というユニークな論点設定が評価された。学位にふさわしい論文として、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

申請者は、学部、大学院を工芸科の鋳金で学び、博士後期課程中にイギリスのRCA(Royal College of Art)で2年間学んだ。学部、大学院では日本の伝統技法である真土型鋳造法を用いて、ダイナミックなレリーフ作品を制作し、存在感を示した。特に修了制作においては、鋳型の雌型の特徴を捉え、陰と陽を強調し、現

代の都市部の陰影と関係をもたせた作品は、印象に残った。

本審査作品は、「黒い木」、「泉」、「胚胎」の3点であるが、イギリス留学後、その表現手段は大きく変化したように見受けられる。基本的に構成要素は、自動車のパーツ（工業生産品の廃材）、銅合金の鋳物（石膏鋳造）、ハニカムストラクチャー（紙、フェルト）である。廃材の鋳物と自身が制作した鋳物、また、紙のような素材としては耐久力のない物を同列にして作品に組み込むことにより、それぞれのヒエラルキーの平均化を試み、作品の一体化と作品の変化に効果をあげている。本人が主張しているヘテロトピア（現実空間とユートピアの中間に位置する場）に作品は存在しており、現実にはあり得ない生命力を感じさせる物体として位置付けている。既存の工芸作品からはかけ離れた作品であり、特に廃材を使用している点に違和感はあるものの、廃材自体が、本人の制作イメージの土台となっており、生命力の獲得の成功につながっていることは評価できる。この廃材を陰と捉え、徹底的に研磨した自作の鋳物を陽とし、現実の都市部の陰影に反映させている点は、表面的に表現手段は変化したがるが、根底にある一貫した制作姿勢は高く評価できるものである。

（総合審査結果の要旨）

申請者は、審査論文「内包する光：ヘテロトピアの表象」の中でユートピアとディストピアをつなぐヘテロトピア（混在郷）概念に触れ、自身の制作において作品と関連づけて論じている。自身の作品の構成の中で、鋳物と光を重視して考察しているが、鋳物においては、自動車の部品のように工業的に生産され、大量消費で廃棄されていくものと、美術家が意図して制作した鋳物との区別のもと自作の中で有機的形態に変換し渾然一体として扱い、そのヒエラルキーの均衡化を狙い、現実社会と対比させ問題の露出を狙っていることは特筆できる。また、光に関しては、鋳物を極限まで研磨したことにより、そこに写り込んで放つ具体的な光を生命の光として自作の中に取り込み、この素材からの効果を作品が内包する光として変換し、ヘテロトピアの領域に踏み込んでいる。

本審査作品は、「黒い木」、「泉」、「胚胎」の3点であるが、イギリス留学後、その表現手段は大きく変化した。修了制作までは、日本の伝統的鋳造技法である真土（まね）型鋳造法を用いて陰と陽がテーマとなっていた。これは鋳物の特性である型をとることによる雌型を陰とし、その型で生成される鋳物を陽として捉え、現実社会の陰と陽に対比させる表現方法を用いていた。審査作品においては、伝統的鋳造法ではなく、ヨーロッパの鋳造法である石膏鋳造法を用いて鋳物を制作する表現手段に変化した。作品の構成要素は、自動車のパーツ（工業生産品の廃材・消費物）、銅合金の鋳物（美術家によるもの・石膏鋳造）、ハニカムストラクチャー（紙、フェルト）であるが、廃材の鋳物と自身が制作した鋳物を作品内で融合させ、紙やフェルトのような素材としては耐久力のない物を同列にして作品に組み込んだ。これらの条件を踏まえ作品の一体化を図ることは困難であると思えるが、現実にはあり得ない生命力を感じさせる物体として位置付けさせている。また、駅のホームでの発車メロディーも内在させ、ヘテロトピアから、現実空間へと呼び戻す効果をあげている。廃材を陰と捉え、究極まで研磨した自作の鋳物を陽とし、現実の都市部の陰影に反映させている点は、表面的に表現手段は変化したがるが、根底にある一貫した制作姿勢は高く評価できるものである。多少の破綻は感じさせられるものの、工芸の領域を拡大する表現内容には今後期待できるものである。